

Ensemble Wits 7th Concert

三鷹市芸術文化センター 風のホール
2008年10月5日(日) 13:30 開場
14:00 開演

指揮：尾崎洋
ドゥヴィエンヌ / フルート協奏曲 第7番
Solo Fl：田中隆英

客演指揮：田中隆英
シューベルト / 交響曲第8番「未完成」

— 休憩 (15分) —

指揮：尾崎洋
チャイコフスキー / バレエ音楽
「くるみ割り人形」より抜粋
序曲～情景～クリスマスツリーの魔法
～キャラクターダンス～花のワルツ



田中隆英 / フルート・指揮

Tanaka Takahide / flute, conductor

桐朋学園大学音楽学部オーケストラ研究生を経てフルートを野口龍、吉田雅夫、奥好寛、金昌国、小出信也、アンドラーシュ・アドリアン、フルート・トラヴェルソを有田正広、室内楽を三善晃の各氏に師事。現在、日本音楽知覚認知学会会員。

今回、氏を招くにあたり、かつて中学、高校時代に世話になったことのある団員の内には少しの逡巡があった。なにしろ氏は少し異邦人のように見え、なおかつ少し声が甲高く、しかも少し口が悪くて、少しマニアック……要するに氏は少しお茶目なのである。ただ、本番を迎えた今や当初の不安は全くの杞憂であった。なんのことはない、分別ある大人になってもなお「よお、でんちゅー！」と呼び捨ててしまう我々のほうがよっぽどどうかしていたのだ。

いやはや素敵な師弟関係があるものだ。今日は実に清々しい一日になるに違いない。
(今西威史)

Program Note

ドゥヴィエンヌ / フルート協奏曲第7番

François Devienne / Flute Concerto No. 7 in D-major

作曲：1787年

演奏時間：20分

フランソワ・ドゥヴィエンヌは18世紀フランスの作曲家・フルート奏者である。生涯に300曲の作品を残したが現代においてドゥヴィエンヌという音楽家を知る人は少ないのではないだろうか。私も今回の演奏会で初めてその存在を知った一人である。ドゥヴィエンヌは合計14曲のフルート協奏曲を書いたが、それらはどれも長い間フルート奏者のレパートリーになることはなかった。

ドゥヴィエンヌのフルート協奏曲が脚光を浴びるきっかけを作ったのは20世紀の最も偉大なフルート奏者の1人であるジャン＝ピエール・ランパルだ。ランパルは1960年代に忘れられたバロック音楽を発掘し、演奏していた。この協奏曲もランパルによって発掘され、演奏されてから世間に広く知られるようになった。現在では、広く世間に……とまではいかないが、フルート奏者の間でよく知られた作品となっている。

話は変わるが、村上春樹の『ノルウェイの森』に次のような台詞がある。「現代文学を信用しないというわけじゃないよ。ただ俺は時の洗礼を受けていないものを読んで貴重な時間を無駄にしたくないだけだ。人生は短い。」これは、永沢というかなりの読書家の言葉である。彼は死後三十年を経ていない作家の本は手に取らないという主義を持っている。もし名作が「時の洗礼」に耐えうる作品であると仮定するならば、「時の洗礼」を受け、今なお多くの人に認められるこの曲は、間違いなく名作と言えよう。 (大野正樹)

シューベルト / 交響曲 第8番「未完成」

Franze Schubert / Sinfonie Nr. 8 in h-moll D. 759 "Die Unvollendete"

作曲：1822年

演奏時間：20分

〈未完成〉交響曲——約1000曲という膨大な作品数ゆえに、散逸したり断片やスケッチしか残っていなかったりするものも多いシューベルトの作品の中で、未完でありながらこれほどまでに「完成」している作品は少ないであろう。

「未完成」といえば今やシューベルトの代表作として名高いが、作曲者の生前に演奏されることはなかった。1823年、シューベルトは、グラーツの音楽協会から名誉会員の称号を贈られた返礼として、協会役員のヒュッテンブレナーに二楽章まで書き上げたこの曲の総譜を渡した。ところがすぐには世に出されず、総譜はそのまま半世紀近くを机の中で眠って過ごすこととなった。なぜ二楽章までしか書かれなかったのか、またなぜ演奏されぬまま忘れられていたのかについては諸説紛々であり、未だはっきりしていない。しかし作品としての完成度、芸術性の高さ、「歌曲の王」と呼ばれるシューベルトらしい流麗な旋律をみれば、「未完成」である理由にこだわることなどあまり意味を持たないのかもしれない。

とはいえ、存在しない三、四楽章、未完に終わった理由——作品自体の美しさもさることながら、そこに空想を羽ばたかせる余地があることが、一層人々を惹きつけるのであろう。それはさながら、欠けていることで魅力を増している彫刻「ミロのヴィーナス」や「サモトラケのニケ」にも通じるものがある。作家の清岡卓行は『失われた両腕 ミロのヴィーナス』の中で、「大理石でできた二本の美しい腕が失われたかわりに、存在すべき無数の美しい腕への暗示という、ふしぎに心象的な表現が、思いがけなくもたらされたのである。」と言っている。「最初から存在しない」と「後から失われた」の違いはあれど、不完全ゆえの空白に時代を越えて人々を魅了する力が宿るとするのはどちらも同じであろう。ならばその不完全さは、空白まで含めて「完成」なのである。 (長岡聡美)

チャイコフスキー / バレエ《くるみ割り人形》作品 71 より抜粋 序曲～情景～クリスマスツリーの魔法～キャラクターダンス～花の ワルツ

Peter Ilyich Tchaikovsky / The Nutcracker, Ballet, op71 (Highlight)

作曲：1891-92 年

演奏時間：40 分

慌ただしい年の暮れ。街に流れるクリスマスキャロルとともに自然と耳に入ってくる音楽と言え日本では第九が定番だが、欧米ではこのくるみ割り人形がポピュラーな演目となっている。チャイコフスキーの描く子供の夢に溢れた幻想世界は、見るもの全てに魔法のような楽しいひとときを与えてくれる。

彼が優れたバレエ音楽の作曲家であったことは、今もなお作品が愛され続けている大きな理由の一つと言えるだろう。彼は生涯に「白鳥の湖」、「眠りの森の美女」、そして「くるみ割り人形」という 3 つの作品を残したが、そのいずれもがバレエの重要なレパートリーとしても、演奏会用に抜粋された組曲としても広く演奏されている。それまではバレエの中で踊りに付随するものだった音楽を、より対等な関係にまで持ち上げた、まるで目の前に情景が広がるかのような音楽は 100 年以上の時を経てもなお輝きを失うことはない。

チャイコフスキーがこの曲を作曲したのは死の 1 年前。憂鬱なイメージが強い彼の晩年だが、円熟の極みに達した管弦楽技法と美しい旋律からはその気配は微塵も感じさせず、全曲に渡り幸福な気分が溢れている。この曲をよく耳にするのは組曲版が殆どであるが、今回はそれらに加えて全曲版からいくつか抜粋してお届けする。バラエティに富んだ内容の中で、私たち Wits らしさを発揮しこの曲の持つ魔法に少しでも触れていただけたら幸いである。

～あらすじ～

舞台はクリスマスの夜。曲は静かに、そして楽しげな小序曲から始まります。どこかおどけた旋律の裏では軽やかに舞う雪のようなパッセージが現れ、この後に展開される楽しく美しい物語を暗示し物語の幕は開きます。

第一幕

第 1 曲：ヒロインであるクララの家ではパーティが開かれ、クリスマスツリーの飾り付けが行われています。

第 2 曲：やがて準備の出来た会場に子供達が現れ、楽しげな行進曲とともにクリスマスツリーの周りで踊り始めます。

第 3 曲：子供達の踊るギャロップに続いて、新しいお客様が登場し大人達のメヌエットとタランテラが繰り広げられます。





第 4 曲 (※)：そこに謎の老人であるドロッセルマイヤーが現れ、子供達にプレゼントを贈ります。中でも兵隊の人形と女の子の人形はひとりでの踊り出し大好評でした。

第 5 曲：寝室に向かうクララにドロッセルマイヤーはくるみ割り人形を贈ります。しかし皆で取り合いになってしまいくるみ割り人形は壊れてしまいます。悲しむクララとそれをからかう子供達。華麗な大人達のダンスでパーティはお開きとなります。

第 6 曲：夜も更け、先ほど壊れたくるみ割り人形が気になったクララが居間に行くと、時計が 12 回鳴ると同時にみるみるツリーが大きくなります。するとハツカネズミの群れと、くるみ割り人形率いる軍隊が現れます。

第 7 曲 (※)：くるみ割り人形の軍隊とハツカネズミの群れが戦闘を始めます。最初はハツカネズミが優勢でしたが、クララの投げたスリッパがハツカネズミの王様に当たり、ハツカネズミの群れは撤退します。

第 8 曲 (※)：くるみ割り人形は美しい王子に変身し、先ほどのお礼に自分の国へクララを招待します。二人は手を取り合って冬の松林を抜けていきます。

第 9 曲 (※)：月明かりの中、雪の精が二人の周りで華麗なワルツを踊ります。

第二幕

第 10 曲 (※)：幕が開くと魔法の城が登場し、皆が王子の帰りを待ちわびています。

第 11 曲 (※)：バラ色の川の上を舟に乗ってクララと王子が到着します。王子はクララが自分を助けてくれたことを話し、お礼の踊りが始まるのでした。

第 12 曲：様々な国のバラエティに富んだ踊りが次々に披露されます。最初はチョコレートの精による明るい雰囲気を持ったスペインの踊り。続いてエキゾチックなコーヒーの精によるアラビアの踊り。お茶の精による中国の踊りはどこか滑稽な響きがあります。怒濤の勢いで駆け抜けるロシアの踊りであるトレパーク。のんびりとしたムードが愛らしいあし笛の踊り。最後は楽しい道化師の踊りと続いていきます。

第 13 曲：花の精が華麗で雄大なワルツを披露します。「花のワルツ」として知られる全曲を通して最も有名な曲です。

第 14 曲 (※)：金平糖の精と王子が軽やかに踊るパ・ド・ドゥです。

第 15 曲 (※)：全員が揃っての踊りです。やがて眠りから覚めたクララはそれまでの楽しい夢を思い出しながら、くるみ割り人形をそっと抱き起こします。

(※)の曲は本日演奏いたしません。

(藤田顕次)



Self-Introduction

決まりきった演奏会形式に固執しないプログラムを組み、小さくても輝きのあるアンサンブルから荘厳な響きのするシンフォニーまで幅広く手掛けることができる団体を目指しています。そして運営を全団員が分かるように公開し、全団員が自由に発言できる場を設けて、意見を取り入れています。

音楽という総合芸術を完成させるには、単純に音楽のみでは実現できない大切なものがある。Witsはそれを常に追い求める楽団です。

過去の演奏会

- 2002年 ハイドン 弦楽4重奏第67番ニ長調「ひばり」
- 2003年 モーツァルト ディベルティメントニ長調 kv.131
- 2004年 ハイドン 交響曲第104番「ロンドン」
- 2005年 モーツァルト 交響曲第40番
- 2006年 ベートーベン 交響曲第5番「運命」
- 2007年 メンデルスゾーン 交響曲第3番「スコットランド」



本日はご来場まことにありがとうございます。
今回の演奏会はWits初のコンチェルトへの挑戦。
そして、初の客演指揮。

Witsは自分たちが伝えたい音楽をどうやってお客様に表現するか、演奏家一人一人が考えています。

そこで、今年は昔の恩師を迎えてもっと経験豊かな音楽の表現をしたい…ということで、コンチェルトを通して一音一音たっぷり感情を込め歌いきる。そして、楽器の本来持っている最大限の響きを出しきることを目指して音楽の大先輩と一緒に考えて練習してきました。

一つ一つの音符がつながって大きな物語を生み出すこと。それが来年のパレエにも通じるテーマです。

来年にはどんな音で物語を作れるようになっていくか。是非期待しててください。 (尾崎洋)



Next Concert

オーケストラによるバレエ 「くるみ割り人形」- 全幕 -

2009年4月25日(土) 18:30 開演
鎌倉芸術館大ホール

松下浩子バレエスタジオ

監修・・漆原宏樹
指揮・・尾崎洋
演奏・・Ensemble Wits

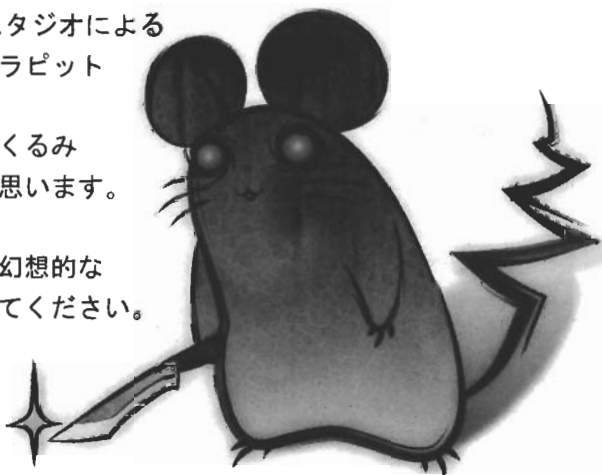
くるみ割り人形、お楽しみ頂けましたでしょうか。

今回演奏することのなかった曲、シーンがくるみ割り人形にはたくさんあります。物語の山場となる、どこかおかしくも激しいくるみ割り人形とねずみたちの闘い。目を見張るような雪の降る美しいお菓子の国。お菓子の精たちの軽やかなステップが奏でるセレモニー。

Witsは4月に松下浩子バレエスタジオによるくるみ割り人形全幕をオーケストラピットで演奏します。

耳だけでなくフルバージョンのくるみ割り人形をお楽しみいただけると幸いです。

くるみ割り人形にいざなわれた幻想的な世界をクララと一緒にぜひ見にきてください。



Concert Members

Violin	Viola	Flute	Trumpet	運営スタッフ
阿部真理子	阿萬美江	☆小澤恵	田中匠	楽団長 尾崎洋
◎井田敦子	潮見渚	久住俊一	宮原信二	計画主任 岡寛子
植田佳奈	須佐芽里	本間優子	☆八木理恵子	
内田勝久	相馬亜紀子			
岡寛子	西岡崇	Oboe	Trombone	演奏会監督
小川智子	☆堀内美穂	大野正樹	☆秋本大士	潮見渚
加我悠		☆高橋圭子	田中潤	
◎亀井庸州	Cello	野村明日香	長岡聡美	会計
唐木美帆	今西威史			小澤恵
☆木村健太郎	☆須見真樹子	Clarinet	Tuba	萩原路子
佐藤麻美	松浦明子	石井絵美	大久保一樹	
澤本昂洋	矢吹克宏	小野陽平		司書
◎鈴木理紗	山口祥子	☆塚本安沙子	Percussion	小林正基
手島奏平	吉田穰		小森葵	原橋ひろみ
南部美希		Fagott	庄司朋生	山口祥子
原橋ひろみ	Contrabass	☆高宮雄太郎	白江美樹	広報制作
萩原路子	☆小林正基	宮城島祐士	廣藤由衣	大野正樹
二島明日香	瀬田愛美		Harp (賛助)	長岡聡美
森村典子	藤田顕次	Horn	佐藤かをり	
吉田曜	古澤圭子	浅井一郎		合宿主任
	丸山温子	戸花優希		阿部真理子
	安井珠里亜	長井海雄		井田敦子
		細田由希		
			◎首席奏者	
			○副首席奏者	

Wits は現在、依頼演奏等もひきうけつつ、アンサンブルを基本として活動しています。

楽団名である「Wits」とは辞書では「知力、分別、頓知」等とあります。いろいろな人の意見に耳を傾けること。聞く人へも演奏者自身にも配慮したい。すべての人の心に素直に響き渡り、感動できるように、人の心によく気がつく楽団でありたいと願い、名づけられました。

終演後、エントランスロビーに演奏者をご挨拶に伺います。面会を御希望の方はホールを出まして受付の付近でお待ちいただければ係りの者がご案内いたします。